

|      |                                            |
|------|--------------------------------------------|
| タイトル | コミュニケーション研究のヨーロッパ種とアメリカ種<br>上：マートン知識社会学の研究 |
| 著者   | 犬飼，裕一                                      |
| 引用   | 北海学園大学学園論集，133：A1-A18                      |
| 発行日  | 2007-09-00                                 |

# コミュニケーション研究のヨーロッパ種とアメリカ種 上

—— マートン知識社会学の研究 ——

犬 飼 裕 一

「科学の歴史がわれわれに教えてくれる通り、一つの正しい理論に接近すること、その正確な応用をつかむことは全く別の事柄である。すべての重要な事柄は、すでに以前に誰かがいつているが、その御当人はそれを発見したわけではない。」（ホワイトヘッド、ロバート・マーティンの引用から）

## 目 次

はじめに

1. マートン、常識から常識の矛盾を突く知性
2. ヨーロッパ種とアメリカ種
3. 用語法と概念構成
4. 専門家と大衆——仮説演繹法と経験帰納法

## はじめに

知識社会学、あるいは知識をめぐる社会学的研究は多くの可能性

を秘めながらなぜか継続的に研究が行われないという不思議な研究領域である。マックス・ウェーバーやゲオルク・ジンメルといった偉大な先行者がおり、カール・マンハイムにおいて一つの頂点を迎えるが、その後は文献が引用され、人物の名前が挙げられることばかりは多くても、自らそれを研究しようとする人材に恵まれてこなかった。知識社会学のアイディアは、ノルベルト・エリ阿斯やニクス・ルーマン、ミッシェル・フーコーやピエール・ブルデューといった近年の有名人にあっても決定的な役割を果たしている。他方で、日本の「戦後」と呼ばれる一時代を代表する丸山眞男<sup>1</sup>は、マンハイムから決定的な影響を受けている。知識社会学は、確かに重要なのである。しかし、偉大な個人が大規模な業績を作り上げ、学界の注目を浴び、たくさんの人々が盛んに論評するのだが、後継者が登場しない。学説史を振り返ればわかるように、名を知られた人物の業績が点として存在するだけで、すぐに途切れ、また別のところから別の人物が別様に貢献し、そしてまた途切れる。毎度その繰り返しである。考えるほどに不思議な領域である。イギリスの著名な

思想史家・兼・知識社会学者のピーター・バークは、次のように書いている。

「知識の社会学的研究は、始まりはめざましかったものの、すでに述べた三カ国「フランスとアメリカとドイツ」いずれにおいても、他の社会学の領域と比して、事実上途絶えてしまうか、あるいは少なくともめつきり著作が書かれなくなってしまう。

一九三〇年代から六〇年代にかけて、唯一目立った活躍をしたのは、アメリカの社会学者ロバート・マートンであった。マートンが書いたピューリタニズムと科学の関係についての著作は、王立協会などの科学機関に多くの関心を払ったものだったが、本質的には、ピューリタニズムと資本主義に関するマックス・ウェーバーの思想を継承発展させたものであった。」(ピーター・バーク『知識の社会史——知と情報はいかにして商品化したか』、井山弘幸・城戸淳訳、新曜社二〇〇四年、十七頁)

それでは、知識社会学が途切れてしまう理由は何なのだろうか？なぜ知識社会学は特定の個人だけに限定された「個人芸」のようなものとしてしか成立してこなかったのか？ 考えれば考えるほど疑問が深くなっていくこの問いについては、バークがあげている「唯一目立った活躍をした」というロバート・マートンについて考えれば何らかのヒントが得られるのではないだろうか。非常に素朴な思いつきのだが、これこそがまさに本稿の出発点なのである。

私見では、知識社会学を今後再生させていくには、「コミュニケーション」という概念をめぐってしばらく続けられてきた議論を取り入れていく必要がある。「コミュニケーション」とは、複数の主体の

あいだで行われる情報のやり取りを意味する。「主体」が、個人であるのか集団・組織であるのかはこの場合問わない。重要なのは「主体」ではなくて、また「情報」そのものでもなくて、「やりとり」である。

この種の議論が登場してくる背景には、社会学理論だけではなくて社会科学理論全般の歴史が関係している。一言でいえば、社会をめぐる理論は、長年の習慣であった一種の擬人法を克服しようとしている。哲学の言葉で言えば、概念実在論、あるいは概念の実体化である。誰もが知っている例を用いれば、「国家」や「階級」や「近代」や「資本主義」という言葉(概念)は、複雑な社会の一面を切り取って理解するための手段であると考えることができる(社会唯名論)。しかし、その一方で、「国家」や「階級」や「近代」や「資本主義」はそれ自身として意思をもち自らの利害のために行動する主体と考えることもできる(社会実在論)。「国家」や「階級」や「近代」や「資本主義」が、あたかも意思をもった人間であるかのように理解されるわけである。まさに擬人法である。そして、二十世紀は「国家」や「階級」や「近代」や「資本主義」といった主人公たちが最大限に活躍した時代であった。これらは、日々を現実生活する人間とは別の実在——主体と見なされてきた。例えば、「お国」や「祖国」あるいは「階級闘争」のために命をささげる個人や集団は、二十世紀にあつては珍しくない。現に無数の人命が消費された。これらの概念は生きて活動している個々人以上の存在意義をもつ存在として取り扱われてきたからである。「お国」や「階級」の意志は、毎日会話を交わしている隣人の意志以上に重要であると確信される

ようになる。擬人法が実在の人物よりも強烈な存在感を発揮するようになるのである。認識のための概念は、いつしか政治そのものへと移行してしまっているのである。

そんな二十世紀を経験した後の社会学理論は、これらの実体化した概念が人々にいかに多くの犠牲を強いてきたのかということ意識する。史実をどのように解釈し、評価するにせよ、突き放した地点から理解しようとするならば、擬人法とは別の手法で現在の社会を理解し、説明しようとする立場が力を持つようになってくる。これは自然な成り行きなのかもしれない。政治的な立場をめぐって延々と論争したり、街頭で闘争したりしても、学問的にはほとんど無意味であるというのも、二十世紀の知的成果の一つであった。互いに異なった価値観同士の中傷合戦や、終わりのない水掛け論が待ち構えているだけだという洞察がこれである。

むしろ、やるべきなのは特定の立場をめぐって互いに争う諸勢力について、それらが成り立っている社会的諸条件を明らかにすることなのではないか。その方が実り多いのではないか。もしもそうならば、実体化した概念についてあれこれ論評するよりも、社会の内部でやり取りされている情報（インフォメーション）の動態について考えるべきなのではないか。ここまで考えてくると、イデオロギーとプロパガンダの二十世紀を経験した後に、社会学と社会理論が今後どのような方向に進んでいくべきなのかにについて、何らかの知見が得られるのかもしれない。

「实在概念から関係概念へ」、すでにこれ自体が古くから繰り返されてきたスローガンである。ただし、理論の世界にあっても「擬人

法」の魅力は抗しがたく、関係概念を冒頭に掲げた理論でも広く受け入れられ多くの人々が言及するようになる。とすぐに擬人化が始まる。例えば、「システム」という概念をめぐる議論を観察すれば、多くの説明は必要ないだろう。そして、「システム」を掲げる理論自体もまた批判や改良が繰り返されてきた。二十世紀中ごろに一世を風靡したパーソンズのシステム論から世紀末のルーマンのシステム論への展開は多くのことを物語っている。

そんな趨勢の中で、知識社会学もマンハイムの頃の「古典的知識社会学」と呼ばれるものからかなりの変貌を経てきた。本稿では知識社会学の「その後」を代表的な仕事の中に観察し、なぜ知識社会学がしばしば断絶を経験し、しばしば個人的な業績としてのみ成立してきた原因を考えることにする。その過程で、独特の曲折を経て展開してきた知識社会学の「今後」を探る手がかりを獲得することにしたい。

## 1. マートン、常識から常識の矛盾を突く知性

「私は次の春学期にやらなければならない科学社会学の講義の準備を目下続けているところである。それらの中では、論文の中で主に行った観察についてさらに展開することになっている。そして、いままさにここで決めなければならぬことは、巨人の肩の上に乗る小人のアフロリズムに、大きく手を入れるか、少しにするべきなのか、何もしないのか？ということである。また、当然、私は読者がこのアフロリズムの歴史に疑問を抱くことも考えに入れなければならないのである。」(Robert K. Merton, *On the Shoulders of Giants*)

至極当然で、とりたてて驚くようなことは何もないのだが、あらためて説明されると何度も膝を打ちたくなるような優れた説明というのに出会うことがある。あまりに説明に無理がないため、一見常識を並べているようにも見えるのだが、かといって誰もが毎度繰り返しているわけでもないといった議論である。著者の中には、新着想を打ち出すのに夢中で、次々と新しい言葉を作り出しては読者を煙に巻くのを楽しみにしている人々がいる一方で、誰でも知っている言葉と議論の枠組みを使いながら、今まで見過ごされてきた問題に光を当てて読者を驚かせるのを無常の喜びにしている人々もいる。

本稿で取り上げるのは、ロバート・K・マートン (Robert King Merton 1910-2003) の論集『社会理論と社会構造』(初版一九四九年、新版一九五七年、増補版一九六八年、など) に収録された「序説 知識社会学とマスコミュニケーション (Introduction: Wissenssoziologie and Mass Communications Research)」である。これは原著で十七頁ほどの小文であるが、マートンが年来の知識社会学研究を論集に収めるに当たって書き下ろしており、密度の濃い論述は大論文に匹敵するか、それ以上の内容を含んでいる。入念に読んでいくと、しばしば通常の学説的な理解を超える内容に出会うことになる。このあたりは、すでに「古典」の地位を確立している著作の実力であるといえよう。

タルコット・パーソンズと並んでアメリカ社会学に一時代を築き上げたマートンは、まさに後者の代表者であるといえる。社会学の概説書には、抽象的な社会学理論と経験的・実証的調査の橋渡しを

する「中範囲の理論 (theories of middle range)」の提唱者として紹介される。また、機能主義社会学理論の領域では、顕在的機能と潜在的機能の区別や、機能(正機能)と逆機能の区別といった視覚を取り入れた点で、パーソンズ派とは異なった独自の理論構成を行ったとの説明が追加されることもある。ただし、貢献の大きさや知名度に比してマートンの仕事は「概説的」な魅力に乏しいのは、魅力的な用語の乏しさなのかもしれない。この点は、次々と新造語を繰り出して(悪名)高い「誇大理論」を建設したパーソンズと異なっている。パーソンズの「理論」を概説しようと思えば、多数のページを割いて特異な用語体系の説明をする必要があるが、マートンの場合はやろうと思えば、数行の説明で済んでしまうからである。難しい用語が次々と出てきて一般人には理解しがたいことが「理論」として高度さの基準であるならば、マートンはまことに素朴な著者であるといわなければならない。

ただし、こういった一見素朴そうに見えるマートンの文章が語る内容は、決して素朴でもなければ、見慣れた話の繰り返しというわけでもない。それどころか、どんな小さな小文にあっても、仔細に読んでいくと必ず鋭利な着想が潜んでおり、時として愕然とさせられる。平明な文体に深い洞察を伴っている点で、マートンは同時代の社会学の著者たちよりも、はるか以前の道徳家(モラリスト)と呼ばれる著者たちを暗示する。

この種の推察は狭い社会学理論の領域だけで考えている場合には、当てずっぽうの印象批評のように思われるかもしれない。しかし、マートンが最初の著作として一九三八年に発表した博士論文の

表題が「十七世紀イングランドにおける科学と技術と社会 (Science, Technology & Society in Seventeenth Century England)」であることを考えると、あながち根柢のないことではないことがわかってくる。科学史の研究に出版したマートンは科学社会学の創始者でもあり、十七・十八世紀のヨーロッパの著述家を書いた作品に通じている。時代は道徳家 (モラリスト) の全盛期である。

また、この点が同世代のアメリカの社会学者に対するマートンの独自性であるということもできるだろう。一言でいえば、マ・ト・ンは歴史の視野をもったアメリカの社会学者なのである。このことは何度強調しても強調しすぎることはないほど重要である。また、マートンの著作の方々には、魅力的な警句が散りばめられており、それらは時に理論そのもの以上の魅力をもっている。より正確に言えば、多くの言葉を費やして論じてきた理論を、この人は魅力的な短文で言い表す才能に恵まれている。このこともまたマートンに古くからの道徳家 (モラリスト) を連想させる原因である。ちなみに、有名なアフォリズム集のタイトル「巨人の肩の上で (On the Shoulders of Giants)」(一九六五年) は、ニュートンの言葉から取られている。すでにこの種の著作が名声を獲得し版を重ねていること自体が、マートンという社会学者の特異性を示している。私事にわたって恐縮であるが、私は、かなり以前マートンを読み始めた頃、『十七世紀イングランド』や『巨人の肩の上で』は、社会学者と同名同姓の別の著者が書いた本だと信じていたくらいである。

同じことは、マートンの理論家としての代表作についてもいえる。例えば、有名な論文「イデオロギーとしての機能分析」(『社会理論

と社会構造』に収録)にある次の一文を読むならば、「機能主義」や「機能分析」を掲げる多くの同国人にはない独自性が明らかである。

「実際、社会学における機能分析が目的論——保守的であるか否かは別として——に陥るとすれば、それは、ただちに先に指摘したよりもっときびしく告訴されるであろうし、また告訴されても当然である。人間思想史上の目的論でしばしばそうであったように、それは馬鹿げた論議 (reductio absurdum) になりやすいであろう。機能分析者は、その場合、神はわれわれが食物のにおいを嗅ぐのにちょうど都合よく鼻の下に口をつけてくれたのだという出したソクラテスの運命 (もつとも同一の理由ではないが) にであうであろう。また、神の設計にもとづく議論に没頭するキリスト教神学者のように、神は「腕の関節を、口に盃を当てるのに過不足なくちょうどよい長さにつくつてくれたが故に、われわれが酒を飲むことを神は明らかに欲している。『さらば盃を手にして、この恵み深い叡智をほめたたえよ。神をたたえて飲む』と論証したフランクリンのような人に、彼はまんまと一杯喰わされるであろう。また「何と美しく万物は自然の配剤がなされているのだろう。子供がこの世に生まれると、すぐさまその子供を世話する母親がいる」といったミシュレのもっと真面目な言い草に彼も同じように耽ることであろう。目的論と相接する他の思想体系と同様に——もっとも、この辺境を超えてかの見知らない不毛の領土に踏み込むことを避けようとはしているが——社会学における機能分析も、はっきりした機能的必要を充足するためにあらゆる現存の社会構造が

不可欠であるという公準をたびたび採用すると、馬鹿げた論議に陥ってしまうおそれがある。」(三十三頁、訳語一部変更)

パソコンズのイメージが頭に焼きついた研究者の眼には異様なものに映るだろう。社会学理論というよりは、啓蒙主義時代の名文家といった書き方である。論旨としては、まず結論ありき、といった様式の目的論が社会学の議論として不毛であるといったことである。ただし、非常な博識に加えて、古今の著述家たちが今日の著者たちと同じく陥っている「馬鹿げた議論」を、単なる教訓としてよりも、むしろそれ自体として楽しんでるのが明らかである。マートンはここに登場するフランクリンと同じ視点で、目的論が陥る論理の罟を面白がっているのは間違いない。神の設計が目的として成り立ちうるのならば、酒が飲みたいという結論もやはり目的論を成り立たせる。もちろん、この種の議論も、モラリズムの得意領域である。

このようなマートンの研究・著述スタイルは、私見では、この社会学者の内部に独特の緊張状態をもたらししている。一方では、ヨーロッパ社会学得意の「歴史」をめぐる探求が行われ、他方ではアメリカ社会学が得意とする同時代を対象とした(非歴史的)経験的・実証的研究がさらなる完成を目指す。さらにいうならば、マートンの文章のユーモアは独得の緊張がもたらしていると考えられることもできる。それは、互いに和解不可能と思われるきた領域の間に他では得がたい知的世界を造り出しているとも考えることができる。

多少大げさな物言いになるが、ここには社会学という学問が成立して以来の最重要の課題が集約されているともいえる。問題は知識

社会学——さらには社会学全般——にあつて「歴史」をどのように取り扱うのかということにある。それは「社会科学」をめぐるヨーロッパとアメリカの覇権争いをどのように解するのか、という問いでもある。さらには、私事にわたる余計なことを付け加えていうならば、本稿は、これまで「ヨーロッパ社会学」の思考に首まで漬かつて考えてきた一読者が、「アメリカ社会学」の優れた代弁者の言い分に感嘆している様子であると理解していただくこともできる。<sup>4</sup>

## 2. ヨーロッパ種とアメリカ種

「アメリカの学者は自分が何を話しているのか分かっていないが、それは大した内容のものではないし、ヨーロッパの学者は自分が何を話しているのか分かっていないが、その内容は大きなものである」(マートン)

社会学という学問領域としばらくの間付き合っていると、いやでも目にする一つの事態がある。それは「理論」と呼ばれる領域と「実証」と呼ばれる領域の間に生じている誰の目にも明らかな分裂状態である。とりわけ日本の学界では「理論」の人々は語学が得意で、主に英語その他のヨーロッパ語で刊行される理論書を次々と消化しては新奇な用語を用いて論文や著作を書いていく。他方、「実証」の人々は勤勉な実務家であり、世界中の同業者と同じく、ことと定めたフィールドに腰を落ち着けて社会調査に精を出す。また仕事の性質上数字の扱いやコンピュータの利用にも長けている。

両者の間の架橋はかなり困難である。「理論」の人々が好む議論は、多くの場合哲学の領域の動きに結びついており、芸術や文学の領域

のアイディアとも対話可能である。これに對して、「実証」の人々は自分たちこそが「科学」としての社会学の担い手であり、自然科学が実現しているような知識の確実性を社会学においても実現すべきだと信じている。両者の相違は、広い意味では人文科学と自然科学の中間に置かれた社会科学全般の宿命であるともいえるだろう。人文科学と自然科学とはそもそも関心のあり方が異なっているのだが、社会科学はこれら二つのどちらかに完全に特化し、他方を切り捨てることのできないからである。とりわけ社会学のような新興領域は、人文科学と自然科学の闘技場といった様相を呈してきた。

ただし、もう一つの対立軸が存在することも忘れてはならない。それは、ヨーロッパ系の社会学とアメリカ系の社会学の根深い対立関係である。ヨーロッパは社会学の成立地であり、對するアメリカは今日の社会学研究最大の根拠地である。両者の関係には二度の世界大戦が大きな影響を与えており、ヨーロッパ産の社会学の一方的な輸入地だったアメリカが次第に自立し、一大発信地へと昇格していく過程が観察できる。もちろん、マートン自身がこの過程を代表する人物であることは間違いない。こうして考えてみると、一九四〇年代に書かれたこの論文は、アメリカ社会学の独立と覇権確立を宣言するものであるという読み方もできるだろう。一九三〇年代に大学院で科学史を勉強していた人物が、一九四〇年代には新しく旗揚げした「科学社会学」の創始者として野心満々の事業に次々と着手していく様子が想像できないだろうか。

マートンが取り上げるのは、当人が「社会構造とコミュニケーションとの相互関係 (interplay between social structure and communi-

cations) を取り扱う研究」と呼ぶものである。マートンは同じく「コミュニケーション」を扱う社会学研究が二系統に分かれている様子について次のように書いている。

「實際社会構造とコミュニケーションとの相互関係を取り扱う研究を属とすれば、両者〔承前…コミュニケーション研究の対照的な二類型〕はその二つの種と見なすことができる。一方はヨーロッパの所産で、そこでたゆみなく発達したものであり、他方は今日までアメリカでいちばん普及したものである。だから次のレッテルを文字通りに解してはならないが、知識社会学を「ヨーロッパ種」、マス・コミュニケーションの社会学を「アメリカ種」と呼んでよからう。これら二つの特殊な社会学の領域はもっぱら観念と社会構造の相互関係を取り扱うが、関心の焦点はそれぞれ違っている。」(四〇〇頁)

生物の学名を属名と種小名の二語のラテン語で表すリンネの二名法は、「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」が同一の先祖から進化して生まれた二つの「種」であることを強調する。<sup>5)</sup>「アメリカ種」は「ヨーロッパ種」の派生ではなく、種の世代として同世代に属するのだというのがマートンの理解なのである。

ただし、この種の議論の立て方自体が、すでに名手の術策に読者をおびき寄せようとするものである。理由は簡単である。元来異なっているはずの二者を架橋する概念をむりやり作り、それを前提として両者の相違をあれこれ挙げて、相違点や対立点について論評するというのは必ずしも正当なやり方ではないからである。バナナとチンパンジーを並べて、「生物」という概念でくくり、バナナとチン

パンジーの相違点をいろいろ挙げて論評してもたいした成果は得られないだろう。そもそも、同一のカテゴリ、あるいは概念——「生物」——でくくって何らかの意義ある議論を構成すること自体に無理があるからである。むしろ、チンパンジーがバナナを美味そうに食べる様子を観察していたほうが有意義であろう。

マーティンのいう「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」の比較に意義があるとするならば、両者が同一の種類の概念であり、「類人猿」としてのチンパンジーとゴリラ、しかも比較によって何らかの有意義な論点が出てこなくてはならない（チンパンジーとゴリラの生態の違いや類似点）。言い換えれば、「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」が同一の問題に取り組むことで何らかの有意義な議論が展開できなくてはならないのである。

マーティンによると、「(ヨーロッパの)知識社会学はたいい規模仕大な理論を好む人々のやる仕事であって、彼らは精巧な思弁や印象主義的な結論を超克する可能性が差当りあるかどうかを、時には全く顧慮せずに、ただ問題が広く重要でさえあれば、専ら理論に没頭していてもいいのだと考える。大体、知識社会学者は、『われわれのいうことが真実かどうかは分からないが、少くともそれは重要な意義をもっている。』という旗印を高く掲げた人達であった」(四〇〇頁)。

これに対して、「世論とマス・コミュニケーションの研究をやっている『アメリカの』社会学者や心理学者は、それと反対の経験主義者の陣営に多く見られ、その旗印には幾分違ったモットーが書かれている。すなわち、『われわれのいうことに特に意義があるかどうかは

わからないが、少くともそれは真実である』と。ここでは一般的主題に関係のあるデータ、換言すれば実質的に証拠としての価値があるデータを蒐集することに重点がおかれていた。しかし最近までは、これらのデータが理論的問題に対して意義があるかどうかについては殆ど関心がもたれず、ただ実際の情報蒐集さえすれば、ただちに科学的に適切な事実観察を蒐集したことになる、というように誤解されていた」(四〇〇—四〇一頁)とのことである。

知識社会学は規模仕大な理論を好み、マスコミ研究者は経験主義者で、ともかく事実を収集する。ヨーロッパ系知識社会学は、意味(意義)を事実(真実)に優先させ、対するアメリカ系マスコミ研究は、意義(意味)よりも真実(事実)を優先するというわけである。科学論や科学哲学の用語で言い換えるならば、ヨーロッパ種は仮説演繹法を信奉し、アメリカ種は経験帰納法を信賴する。大雑把に言えば、方法がまるつきり異なっているのである。ヨーロッパ種は哲学的な洞察から出発して、「仮説」を立て、おのれの理論に都合な事実を集めて議論を組み立てるのに対し、アメリカ種はともかくも経験的で確実な事実を集めていけば、いつかは重要な科学的発見に行き着くと考えている。

バナナとチンパンジーの比喻は唐突であるとしても、両者の相違は相当なものであり、違いすぎるがゆえに互いに無干渉の平和が維持されているともいえないだろうか。これは一九四〇年代に書かれた文章であるが、現に六十年以上を経た今日でも両者の距離は縮まっていない。

仕大な理論構築と経験主義の対立。この対立は知識社会学やマス

コミ研究という二領域だけにとどまらず、学問に対する考え方の根底からの相違につながっているからである。議論を社会学だけに限定しても、「ヨーロッパ系」の社会学と「アメリカ系」のそれとはかなり異なっている。異なっているだけではなく、互いに別物の学問として相互に干渉しないようにして共存しているといった方がよい。ところが、マートンの議論を注意深く観察していくと驚かされるのは、通常の場合は相互不干渉の住み分けのようになっていく「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」を、何とかして統合しようと努力していることである。

マートンがいうように、両者の違いはそれぞれが発展した社会的背景——「社会的構造」——の違いに結びつけて論じることが可能であろう。社会理論と社会構造の関係という、それ自体が高度に知識社会学的な問題である。ただし、ここでのマートンの主題は、この種の知識社会学的な、あるいは「ヨーロッパ的な」問題ではなくて、両者を統合することなのである。当人の言葉を借りれば、「両者の科学的長所を備えながら、しかも両者の不必要な欠陥をもたない巧みな組合せを目指して、これらの関連しあった社会学的研究領域の統合を提唱すること」(四〇一頁)である。

マートンはここにヨーロッパ系の知識社会学とアメリカのマスコミ研究の領域を横断した独自の研究領域を打ちたてようとする。これは今日の視点から見てもかなり野心的な試みである。ただし、六十年後の読者が、とりあえず「野心的な試み」と評価する場合には、どうしても「後知恵」を得た者の優越感が入り込んでしまう。当人の努力が成功しているのかどうかは後ほど論じることにするが、両

者の相違についてマートンほど明瞭に説明してくれている例を、筆者はこれまで殆んど知らなかったことをここに正直に記しておくたい。本稿の冒頭に書いた、至極当然で、とりたてて驚くようなことは何もないのだが、あらためて説明されると何度も膝を打ちたくするような優れた説明」とはこのことである。

### 3. 用語法と概念構成

「カール・マンハイムに代表される知識社会学がふたたびドイツで影響をもち始めている。それは知識社会学がもっている一種無害な懐疑の外見のお蔭である。知識社会学はその実存哲学的ライバルと同様、すべてを疑問視し、かつ何も着手しない。」(アドルノ『プリズメン』、渡辺祐邦・三原弟平訳)

マートンの「知識社会学とマスコミコミュニケーション 序説」にあつて最も鋭利な指摘は、「ヨーロッパ種」の知識社会学研究にみられる研究対象の曖昧さである。「ヨーロッパ種」にあつては「知識や思考が極めてルーズに解釈され、殆んどあらゆる観念や信念が包括されている」(四〇一頁)。ここでもマートンの面目躍如である。言い換えれば、ヨーロッパの「知識社会学」の弱点がここにある。つまり、「知識社会学のいう肝心の『知識』とは一体全体何なのだ?」という質問や、「科学的に検証可能な定義として提示してくれ」という要求に、ヨーロッパ系の知識社会学者は容易に答えられないのである。

ここで主に言及されているのは、カール・マンハイムの仕事である。ある時期には知識社会学の代名詞のように扱われていたマンハ

イムの名前は、マートンにとっても偉大な先行者である。ただし、アメリカの経験主義の風土に育った人間にとって、マンハイムの議論は戸惑いの対象となる。以下は、まさにマートンの議論が最大の切れ味を見せている部分なので、少し長くなるがマンハイムの引用を含めてそのまま読んでいくことにする。

「右のような事実の例証は余りにも多すぎて、二三のものを求めようとしても、困惑を感じる位である。例えば、マンハイムのごときは「中世後期における下層階級」の精神状態を要約して、「彼らはほんの少しづつ自分らのもつ社会的政治的意義を自覚するにいたった」という。或いはまた、「すべての進歩的集団は、観念をもって行為に先行すると考えている」という事実を、彼は重要だと考えるだけでなく、それは真実でもあると考える。しかも、以上のことは定義の問題であるにもかかわらず、あたかも表面上は徹底的な観察の問題であるかのように彼はいう。また彼はつぎのような有益な仮説——事実についてのいくつかの仮定からなる——を提起する。すなわち「……支配政党が積極的に提携して、議会で連合すればするほど、またその政党が初めもっていたユートピア的衝動を、同時にまたその広い視野を捨てれば捨てるほど、その社会変革の力は具体的な個々の瑣末事の関心のために吸収されてしまう傾きがある。政治の領域に見られる変化と全く平行して、科学的見方の方にも政治的要求に一致した変化が生じ、かつては形式的図式であり、抽象的・全体的な見解にすぎなかったものが、特殊なばらばらの問題の研究に解消されてしまう傾向がある」と。こういういい方は示

唆的であり、明白で殆んど疑いをいれないし、また知識人が政治的社会のなかで生活するうちに経験し、おそらくは折にふれて気づいたに違いない多くの事柄に多大の光明を与えるところから、ひとはそれを仮説ではなく、むしろ事実だと考えたがるのみならず、ヨーロッパ種の社会学的方式にしばしば見られることだが、こういういい方は多くの細かい経験を掘んでいるようにみえる。したがって、これが興味ある仮説以上のものと見なされるためには、先ず非常に苦勞の多い経験的調査が必要であるのに、読者はそのことを考えてみようとしなさい。それは、すぐに一般化された事実として不当な地位を得るのである。」

(四〇三—四〇四頁)

まさにマートンの真骨頂である。アメリカの社会学者によるヨーロッパの知識社会学、さらにはヨーロッパの理論社会学全般への批判としてこれ以上に説得力のある文章は稀だろう。マンハイムを引きながら、マートンは実に的確に「ヨーロッパ種」の弱点を突いている。

このことは、例えばパーソンズの議論などと比較すると際立っている。しばしば指摘されてきたように、パーソンズがマックス・ウェーバーやデュルケムのようなヨーロッパの社会学者を論じる際、ドイツやフランスの歴史や哲学的な問題は意図的に無視される。「ヨーロッパ種」に属する批判者からすれば、決定的な欠陥であるということになる。しかし、パーソンズの側からすれば、ヨーロッパの社会学者は「科学」として論じるべき問題を、歴史や文学の知識や哲学史の蘊蓄で代用していると反論することになる。つまり、

パーソンズがマックス・ウェーバーやデュルケムから受取るのは「理論」の素材であって、ドイツ哲学の蘊蓄やフランス革命の史実ではないというわけである。この種の議論は、いうならば水掛け論である。一方には、ともあれ自分なりの「科学」や「理論」を最優先する人々があり、他方には、各国の歴史や古代以来の哲学的な問題の重要性を強調したい人々がいる。両者の関心がそもそも異なるのだから、批判は互いの関心や価値観に対する判断に行き着いてしまうからである。

これに対して、マートンは「ヨーロッパ種」の心臓部に切り込むことで、容易には反論不可能な論点を捕まえている。突き放した視点からいえば、マンハイムは、「下層階級」や「社会的政治的意義」や「進歩的集団」や「ユートピア的衝動」や「社会変革の力」といった言葉を毎度頻繁に用いるが、これらを厳格に定義し、検証可能な命題として提示しているのか？ と疑うわけである。もつといえ、たとえば「ユートピア的衝動」のような用語は確かに哲学的、文学的には魅力的な言葉であるが、魅力的であるがゆえに厳密に定義することは困難である。また、これらの言葉——概念ではない——を用いて、少なくともマートンがいう意味で「科学的な」——英語圏の著者は英語の science と、ドイツ語の Wissenschaft との違いをしばしば強調したがる——検証に耐えうる命題を構成するとなると、ほとんど絶望的に困難である。ところが、マンハイムのようなヨーロッパの著者は、そんなことが必要であるということすら考えようともしないのである。

これは鋭い指摘であるといわざるをえない。この種の議論では、

難しい用語同士がぶつかり合い、過去の学説の説明や人文科学系の蘊蓄が開陳される。文体からして魅力的で、深い思想や高度に抽象的な思弁を語っていることは間違いないが、それを現実の社会生活で検証できるのかという点で困ってしまう。一言でいえば、「まるで空中戦のような議論」である。これは社会学の学会で理論系の学者と実証系の学者が同じ部会で報告するとき、実証系がよく口にする皮肉である。

もちろん、マンハイムの側からの反論は可能である。最も妥当な線からの反論は、マートンが自明のこととして振りかざす「科学」についての見解を自分は受け入れていないと宣言することである。つまり、マートンが自明視しているような「経験的調査」など不要であると明言するならば、この種の批判は効力を失う。しかし、この種の宣言は決して気楽にできるものではない。かなり気楽に宣言できるのは、社会学というよりも社会哲学を標榜する人物である。仮にこの種の宣言をしたとすると、議論は自動的に科学論の次元に移動する。ただし、ここから先も再び水掛け論が始まる。

「アメリカ種」——あるいは実証家は、マンハイムのような議論は、突き詰めれば科学ではなくて哲学や文学の仲間であると断言したくなってしまう。そんなものはしよせん個人的な見解であるか、特定の教理を共有する秘教集団内部でしか通用しない言説なのということになる。「ヨーロッパ種」——あるいは理論家は、経験的調査や数値化といった手法が「科学」を占領する事態そのものを深い哲学的思弁によって論難しようとする。生きた人間が生活する複雑な社会を「調査」は不当に単純化するものであり、「数値化」はその行為

自体が人間と社会の物象化に手を貸すことであるといった議論である。マルクス主義と現象学——両方ともヨーロッパ由来——のよく知られた用語を使えばこの種の議論はいくらでも続きが書ける。そもそも「ヨーロッパ種」にとって重要なのは、考えるに値する命題を提示することであって、命題を検証することではないからである。それは自己目的な単独の「科学」よりも、種々の科学を成り立たせている基本条件——いうならばメタ科学——に対して興味を抱く立場である。これらは両方とも決して見覚えのない議論ではないし、むしろ見飽きて陳腐になっているくらいである。

こうして本稿の議論はやはり同じ地点に戻ってしまった。ヨーロッパとアメリカの知的覇権争いが根本的な原理をめぐる水掛け論に行き着いてしまうからである。つまり、議論は検証可能な事実をめぐる討論によって問題を解決することが不可能な次元にはまり込んでしまうのである。そもそも、経験的に検証不可能な次元にまで立ち入って反対者を論難することは、経験主義にとって犯してはならない最大の過ちでもあった。経験的に検証できないことは、経験主義にとっては原理的に存在しないことだからである。逆に、この種の哲学的な次元での議論は「ヨーロッパ種」にとって得意中の得意であるが、この種の議論でどれだけ非難されても「アメリカ種」とっては無意味である。空中戦がいくら派手に戦われても、地上で堅実に勤務にいそむ「アメリカ種」にはどうでもよいことばかりだからである。

#### 4. 専門家と大衆——仮説演繹法と経験帰納法

「十九世紀の後半には、近代人の世界観全体が、もっぱら実証科学によって徹底的に規定され、また実証科学に負う「繁栄」によって徹底的に眩惑されていたが、その徹底性たるや、真の人間性にとって決定的な意味をもつ問題から無関心に目をそらさせるほどのものであった。単なる事実学は、単なる事実人をしかつぐらない。」(フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』、細谷恒夫・木田元訳)

ヨーロッパ種とアメリカ種の相違は研究対象の相違でもある。本稿では、すでに理論系と実証系、ヨーロッパ系とアメリカ系の間の相違や対立点について論じてきた。ただし、意図的に落としてきた論点があった。それは、なぜ両者の相違が生じてきたのか？ という問題である。

マートン自身の知的背景にある経験主義の原理に従うならば、学問の性質を規定するのは研究対象の性質でなければならない。研究者が日ごろ研究活動をつづけ、研究対象を深く知る中で、研究と研究方法も対象に適するように改良を加えられていく。特定の対象に付き合っ、石の上にも三年、さまざまな知見が開けていくというのが経験主義の根本である。長年やっていけば、そこから何か大切な知見が得られる(帰納法)に違いない、というのが経験主義の根幹であり、これこそが科学論の領域で「経験帰納法」あるいは「経験帰納主義」と呼ばれてきたものである。

哲学史の通常の説明では、経験帰納法はイギリス経験主義の伝統に結び付けて説明される。これに対立するのが、大陸合理主義の伝

統の下で発展してきた仮説演繹法の流れである。学問の出発点は仮説であり、そこから引き出された命題が、種々の検証を経ることで、当初の仮説が生き残っていくのだという考え方である。現に、大陸ヨーロッパには、次々と大規模で精緻な「哲学」や「思想」が登場し、対するイギリスでは厳密な実験科学や、種々の実用工学が発達する。社会問題については、ヨーロッパ系の専制主義を尻目に、現実の諸勢力の妥協の原理である「民主主義」が成立したのもイギリスであったというのが、毎度おなじみの思想史の話である。

おおよそ教科書的な説明は以上のようなのだが、両者には別の側面もある。それは経験帰納法が現場（フィールド）を重視するのに対し、仮説演繹法が仮説を生み出す特定の少数者に関心を中心することである。言い換えれば、「社会」を論じることを責務とする社会学にあつて、経験帰納法は「現場」に生活する多くの人々に直接対面しなければならない。他方、仮説演繹法は書斎の知識人や業務を統括する専門家、あるいは権力者の思考の総体——漠然とした「知識」——に関心を抱く。

「ヨーロッパ種は、知識の社会的根源を掘りだし、知識や思考がその環境をなす社会構造によってどんなふうに影響されるかをひたすら研究する。ここでは、社会による知的視界の形成が主な焦点となつている。この学問領域では、第十二章や第十三章で示唆するように、知識や思考が極めてルーズに解釈され、殆んどあらゆる観念や信念が包括されている。それにしても、この学問領域の核心をなすものは、系統的な証拠によって多少とも確認されるような知識が、どんな社会的脈絡から生じたか、

ということに対する社会学的関心である (a sociological interest in the social contexts of that knowledge which is more or less certified by systematic evidence)。すなわち、知識社会学がいちばん直接的な関心をもっているのは、科学であれ、哲学であれ、また経済思想であれ、政治思想であれ、とにかくそれらの専門家の知的所産 (the intellectual products of experts) なのである。」(四〇二頁)

実はこの一文に出会ったことが、本稿を準備するきっかけであった。ヨーロッパの知識社会学 (Wissenssoziologie) は「専門家の知的所産」に集中するというのは、まさにその通りである。この一文は、ヨーロッパ系の社会学に取り組んできた人々には、相当に意味深長であるにちがいない。具体例は、ほとんど無限に思いつくはずである。とりわけ、これはマンハイムの「知識社会学」について突き放した地点から最も的確に説明していると評価することもできるだろう。また、永年の疑問——あるいは漠然とした不安感——が一気に払拭されたことを、マートンに本当に感謝したい。まさに学恩そのものである。確かにヨーロッパ種とアメリカ種の関心の相違として考えるならば、今までヨーロッパ系の知識（情報）だけで「知識社会学」として理解してきたものの本来的な性格についてかなり明らかになる。弱点についてはなおさらである。

これに対し、「アメリカ種」はヨーロッパ系の社会学、知識社会学とは別の道を行く。

「アメリカ種には、一般の知的状態（これをインフォメーションの水準と呼ぶところに、アメリカ的特徴の意義があるのだが）

に対する関心もいくらか含まれてはいるが、その焦点は一般大衆の信念を社会学的に研究すること (the sociological study of popular belief) にある。それは知識よりも、むしろ特に意見 (opinion) に焦点をおいている。もちろん、知識といふ意見といつても、白黒というようにはつきりした区別ではない。両者の境界線は任意のものではないが、例えば国境線のように明確なものでもない。意見は微妙に移行していつのまにか知識となるが、これとても、意見のうちで特定の証明基準によって確認された部分に外ならない。このように意見が発達して知識となるように、一見知識と見られるものも、単なる意見に墮してしまふ。しかし境界線上にあるものを除けば、やはり両者は区別しなければならないのであつて、それはコミュニケーションの社会学のヨーロッパ種とアメリカ種が、それぞれ独自の焦点をもっていることのうちに現われている。」(四〇一—四〇二頁)

この種の議論は「アメリカ種」に長年取り組んできた人々には何一つ新しいことのない常識なのかもしれない。まさに読者のご教示をお願いしたいところである。ただし、「ヨーロッパ種」に専ら取り組んできた本稿の筆者にとつては新鮮な展開なのである。マートンの言わんとすることをさらに展開するならば、一部の限られた知的エリートではなくて、「社会」が日々産出される現場(フィールド)に注目してきた人々にとつて、「大衆的(popular)」であることは、そのまま「社会的(social)」であることの同義語なのである。約言すれば、「アメリカ種」にとつて、社会学(sociology)とは大衆的な事実を明らかにする科学——Wissenschaftではなくて science——な

のである。

私見では、いわゆる「グローバル化」(＝アメリカ化)の地球的(グローバル)趨勢にある現代社会で「アメリカ種」の社会学、とりわけマスコミ研究に対して自分なりの立場表明を行わないことは、「ヨーロッパ種」に従事する人々にあつても無責任である。またこの種の無責任を続けていると、かび臭い「学説史」の蘊蓄世界に閉じ込められてしまふ。昔のヨーロッパ人が生み出した「社会学」はそれ自体として見事な成果であり、確かにそれだけを探求するに値する知的所産であるが、今日われわれが生活する「社会」の本質を完全にとらえることはできないのではないか? という実感が広がりにつつある。ヨーロッパ人が「大衆の反逆」(オルテガ)と呼ぼうと、「権威主義的人格」(アドルノ、ホルクハイマー)と呼ぼうと、大衆の「自由からの逃走」(フロム)を指摘しようと、アメリカ人が先頭を走る「他人志向型」(リースマン)の研究は所与の事実であるとか言いようがないからである。

「豊かな社会」(ガルブレイズ)や「高度消費社会」(リオタール)に生活する住民は、限られた知的エリートが考えるよりも広い社会に住んでいる。そして、ヨーロッパ種が専念する「専門家」の理解を超えて日々新たな現実を生み出しているのである。知的エリートが考えもしなかった領域から次の時代の「現実」が生み出される状況は、「大衆文化(popular culture)」を観察する上でしばしば直面することである。しかも、大衆文化は長い期間の間に、知的エリートが注目する文化へと変質していくことすらある。

ここにヨーロッパ流の仮説演繹法を批判する糸口があることはい

うまでもない。肝心の「仮説」を生み出すのは少数の知的エリートであるとしても、数少ない彼らに社会科学上の「仮説」を想起させるのは、同時代の無数の一般人からなる「現実」だったのではないか？ という疑問である。

もちろん、科学哲学の領域に鉄壁を張り巡らした仮説演繹法はこれくらいの批判で揺らぐようなものではない。反論は簡単である。それならば、なぜ一般の人々は「仮説」を構成しないのかと問うならば、議論は反転するからである。例えば、科学論の議論で毎度登場する有名な事例を使えば、ジェンナーが種痘法を開発したのは臨床経験からの帰納法によるのであって、「種痘法」というアプリオリに与えられた仮説に適合する物質を探していたわけではないのだという議論がある。ところが、それならば有史以来天然痘の治療に取り組んできた無数の医師はなぜ種痘法を考え付かなかったのか？ また、それ以前から牛を飼ってきた牛飼いはなぜ自分たちの経験から天然痘の治療法を提案しなかったのか？ という疑問に経験帰納主義は答えられないのである。やはり、研究のある段階で種痘法という仮説を思いついたジェンナーという個人の存在が決定的に重要なのである。しかし、ジェンナーが臨床の現場にいなかったならば、肝心の仮説も生まれなかったであろうということは容易に想像できる。仮説演繹法も仮説構成の段階での経験帰納法の介在は無視できないわけである。<sup>10</sup> ジェンナーの事例はあくまで単一の命題をめぐるものでしかない。これに対して、社会科学ははるかに複雑に入り組んだ対象を観察する中で、「仮説」を構成しなければならない。より複雑な対象を説明する「仮説」を検証（反証）可能な形で提示する

仕事は、単なる経験を越えるものであると、仮説演繹法の信奉者は確信するわけである。

二十世紀末以降の社会学者は、大陸ヨーロッパの仮説演繹法が発する抗しがたい魅力に引き寄せられながら、英語圏、とりわけアメリカで大きな成果をあげてきた経験（観察）帰納法の圧倒的な影響下に仕事を続けてきたということが出来る。再度マーティンの議論に戻ると、両者の認識論上の相違点は研究方法の相違に直接つながっていく。

「両種の方針は、さらに細部にわたって微妙な対比関係をはつきり示している。すなわち、認識の面では、ヨーロッパ種は知識に注目し、アメリカ種はインフォメーションに注目している。知識とは事実または観念の組織体を意味するのに反して、インフォメーションには、かような体系的な関連をもった事実または観念という意味が含まれていない。したがって、通常アメリカ種は一般大衆のもつばらばらの断片的なインフォメーションを研究するが、ヨーロッパ種は少数者に利用される知識の全体的構造について考える。アメリカの方は、ばらばらの断片的なインフォメーションの寄せ集めに重点を置き、ヨーロッパの方は、教理の体系に重点を置く。ヨーロッパの方では、極めて複雑な相互関係にある教理の体系を、概念的統一、抽象と具体の諸段階、および範疇化（例えば、形態学的または分析的）に着目して、分析することが重要となる。アメリカの方では、例えば、因子分析の技術によって、経験的に生ずる一群の観念（または態度）を発見することが重要となる。前者は論理的に存立

する関係を強調し、後者は経験的に生ずる関係を強調する。」(四〇二頁)

論理のヨーロッパ種と経験のアメリカ種といった説明は、おそらく判りやすすぎるのかもしれない。ただし、ヨーロッパ系の学問を身につけそれに慣れてきた人間にとって昨今の社会科学の趨勢に対して抱いている漠然とした違和感を、マートン以上にすっきりと見事に説明してくれた例を今まで知らなかった。まさに疑問氷解の瞬間である。ただし、長年の疑問氷解はこれだけにとどまるわけではない。

(つづく)

## 注

1 むしろ、日本でマンハイムの知識社会学が受容されるのは、丸山眞男經由だったと考えた方が公平であるとすらいえるだろう。

2 最近の著作では、伊勢田哲治『疑似科学と科学の哲学』(名古屋大学出版会二〇〇三年)が、マートンからクーンやファイヤアーベントにいたる科学社会学や科学哲学の動向について手短にまとめている。ただ、マートンについてはかなり教科書的であるといわなければならない。

3 マートンがつけた原注によると、この一文はアンドレ・モルレに宛てたフランクリンの手紙にあり、モルレ自身が回顧録(『十八世紀および革命についての回顧録』(二八二二)で書いているとのことである。フランスの神学者・哲学者アンドレ・モルレ(一七二七—一八一九)は『百科全書』の宗教に関する項目の執筆者であり、またベツカーリ

アの『犯罪と刑罰』(一七六四)の仏訳者でもある。

4 筆者はこれまでマックス・ウェーバーからカール・マンハイムやノルベルト・エリ阿斯、そしてニクラス・ルーマンにいたる主にドイツを中心とした知識社会学(Wissenssoziologie)の展開について研究し、専門的な著書や論文を書いてきたし、またそれらの議論から得られた知見によって「日本人論」についても立ち入って論じてきたが、本稿で取り上げるマートンの議論については全く未見であったことを、ここで正直に告白したい。ただし、一九四〇年代にすでに刊行されていた業績について今更素朴な驚嘆を表明することはあまり自慢できる仕事ではない。それというのも、マートンの『社会理論と社会構造』はアメリカ社会学を研究する人々にとっては、ほとんどイロハに属する基本文献だからである。

5 生物学由来の概念を用いた比喩は確かに、学問の発展を説明する上で説得力がある。多少余分なことを付け加えるならば、ニクラス・ルーマンがいうように学問はオートポイエティック(自己産出)的システムとして理解することができるところである。生物進化上のさまざまな分化はまず互いに交雑可能な亜種を次々と生み出す。ところがさらに分化が進行すると、次第に「進化の袋小路」に入ってしまう学問が登場してくる。この種の学問は自家受精を繰り返し、他者と交雑できない特異な個体を無数に産出していくようになる。そして、「衰退」に向かっていくというわけである。ただし、この種の生物学的アナロジーを用いる場合に注意しなければならないのは、当該の科学研究に従事している人々自身が、アナロジーを受けいれていることである。そして、それに沿って自分たちの学問の過程を理解しようとするのである。

6 いうまでもなく、この種の明言を行う研究者はごく少数である。近年の経験主義と数量化のますますの伸張は広汎な学界における常識を形成しつつあり、高度に思弁的な方法を標榜している社会学者でさえこういった学界の趨勢に対する敬意を表明するようになっていく。平たく言えば、「社会調査など無意味だ」と明言する社会学者は存在したとしてもごく少数派である。この意味でも、マートンの批判は強力な

のである。それは、思弁的な方法に専念する社会学者ですら内心密かに抱いている無力感や後ろめたさに直接訴えかける力を持っているからである。

7 例えば、フランクフルト学派の魅力の大きな部分を占めている言説——「啓蒙の弁証法」「エロス社会」他——は、確かに、当人の思いついた「仮説」以前の哲学的思弁に依存しており、検証を行おうにも検証可能な命題として構成されることをはじめから拒否している。結局残るのは著者の文学的な魅力や、長年の名声や、地位による権威だけだということになってしまう。同じことはヘーゲル哲学やマルクス主義をめぐってヨーロッパ人が延々と考えてきた多種多様な「秘教」についてもいえることであるし、マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の命題についてもいえることである。他方で、ウイトゲンシュタインの果たした「革命」が、英米系の社会科学者を中心になぜこれほどまでに受け入れられたのかということも関係している。簡単に言えば、これまでのヨーロッパ人（イギリス以外の大陸ヨーロッパ人）は「語ることができないこと」について延々と無意味なおしゃべりをしてきたのではないのか？ という問いであり、その種のおしゃべりを避けて科学的に検証可能な問題は、言語論や言語行為論、言語ゲーム論だけなのだというわけである。この事態を指して「言語論的転回」と呼んだのは、これまたアメリカ人のリチャード・ローティーであった。

8 『社会理論と社会構造』第十二章「知識社会学」、第十三章「カール・マンハイムと知識社会学」。

9 反省を込めていうならば、私はヨーロッパ種の知識社会学に全面的に寄りかかって「日本人論」という名の大衆の「意見」をあれこれ解剖してきた。その場合に、どうしても気まずいものがあるのは、ヨーロッパ流の知識社会学の研究対象としては、「日本人論」はあまりにも知的に低級であり、俗化された学知への批判めいた文言ばかりが先行してしまうことである。例えば、ベネディクトの『菊と刀』のような大衆向け読み物を取り上げて、方法論上の過誤や宗教的偏見に基づく独断を指摘したところで、ほとんど意味がないのは事実である。それ

は、いうならば鶏を割くのに牛刀を用いるような作業であったということもできる。むしろ、私がやるべきだったのは、アメリカ種のマスコミ研究の手法でこの種の「読み物」が主張したいと願ってきた「意見」を、社会学的に研究することであった。

もちろん、私なりの模索によって、この種の手法をアメリカのマスコミ研究とは別個に私が編み出してきたという自負はある。現にいろいろ考えてきた。ほかならぬマートンの概念である「自己達成予言」を手がかりに日本人論の構造を分析するという作業も行っている。またリースマンがアメリカの大衆社会について開発した「他人志向型」という概念と日本人論でしばしば用いられてきた「甘え」や「集団志向」という概念の近似性を指摘し、「大衆社会論の一変種としての日本人論」という結論にも到達している。参考のため関連する拙稿を以下に挙げておくことにする。

拙稿「日本人」を語る二つの方法・ルース・ベネディクトとジョン・ダワー、『史観』（早稲田大学史学会編）第一四八冊、二〇〇三年

拙稿「にせユダヤ人が語る「日本」の物語——山本七平と日本人論の知識社会学——」、『北海学園大学 学園論集』第一一七号、二〇〇三年

拙稿「菊と刀とコラとピストル——ルース・ベネディクトと日本人論の知識社会学——」、『北海学園大学 学園論集』第一一八号、二〇〇三年

拙稿「ジャパノロジーと人種主義の語り方——日本人論の知識社会学・中間考察1——」、『北海学園大学 学園論集』第一一九号、二〇〇四年

拙稿「遂行的矛盾と自己達成予言——日本人論の知識社会学・中間考察2——」、『北海学園大学 学園論集』第一二〇号、二〇〇四年

拙稿「他人指向と自立の理想と現実——日本人論の知識社会学・中間考察3——」、『北海学園大学 学園論集』第一二二号、二〇〇四年

拙稿「にせ外国人の社会学——パオロ・マッツァリーノ著『反社会学講座』（イースト・プレス二〇〇四年）——」、『北海学園大学 学園論集』第一二三号、二〇〇五年

拙稿「日本」を知識社会学で論じるには 1、『北海学園大学 学園論集』第一二七号、二〇〇六年

拙稿「山本七平と「にせ外国人」の系譜学——「日本」を知識社会学で論じ

10

るには 2」、『北海学園大学 学園論集』第一二八号、二〇〇六年

科学哲学の領域ではかなり以前から仮説演繹法が経験帰納法を圧倒している。論理実証主義で有名なウィーン楽団と「反証可能性」を打ち出したカール・ポパーの名前を挙げておくだけで十分であるし、彼らが大陸ヨーロッパで生まれ英語圏の科学哲学の領域を制圧する本稿にとつても興味をそそる。今田高俊が「自己組織性」をめぐる議論のはじめのほうに次のような捨て台詞を書いているのは、仮説演繹法の鉄壁の防備体制と考え合わせると面白い。科学哲学のような空中戦では仮説演繹法が経験帰納法を圧倒しているが、社会学のような地上戦ではそうでもないというわけであろうか？

「さてポパーの論理実証主義にたいする批判的挑戦は、検証可能性の問題にとどまらない。検証問題は帰納論理と不可分に結びついており、検証を否定することは帰納論理を否定することでもあった。古典的実証主義が定式化した観察帰納法は、科学の作業があったかも経験的観察を一般化して理論を導くことにあるかの主張をする。けれども、それは正しくない。帰納的一般化が実際にあるかのように見えるのは「一種の光学的錯覚」にすぎない。帰納論理は純粹に論理的な理由から存在しないのであり、「帰納論理はあらずもがなの余計ものであり、論理的矛盾に陥らざるをえない」とポパーはいい切る。

だとすると、帰納論理は本当に科学から追放されるべき対象なのか。たとえばジェンナーは、天然痘に悩まされている人びとの治療にたずさわるなかで、現実を直視するたゆまぬ観察によつて種痘法を発見した。この行為は科学と呼ぶに値しないのだろうか。彼は、牛を飼っている家庭とそうでない家庭の人びとのあいだで、天然痘にかかるものの割合が異なることを発見し、演繹論理による推論なしに種痘をあみだした。のちに種痘の原理を因果的に定式化した作業が科学と呼ぶに値して、ジェンナーの作業はそうではないといい切れるだろうか。科学はそこまで横暴であつてよい訳がない。」(今田高俊『自己言及性』、創文社一九八六年、四十四―四十五頁)